

# 第5回



## 入選作品集

令和3年7月  
(一社) 家の光協会 記事活用促進部

## ■ ■ 総 評 ■ ■

新型コロナウイルス感染症の影響でさまざまな活動が制約されています。『家の光』2020年10月号には「できないことを嘆くより、できることをみんなで考えて」というJA全国女性組織協議会の加藤和奈前会長のメッセージとコロナに負けない各地の活動が掲載されました。全国の仲間の言葉や活動は、同様の課題に直面している仲間を奮起させます。

今回の応募作品にもコロナ禍で奮闘する「家活」報告が多く寄せられました。非常時の柔軟な対応力は、これまでコツコツと地道に行われてきた「家活」によって培われてきたものと思われまます。また、「くじけない!」「諦めない!」「この環境で何ができるか」という個人の強い意志や熱い思いが「家活」の原動力となっています。マスク越しでもいい……、オンライン上でもいい……、それでも笑って楽しめる環境をつくろうという活動もみられました。今だからこそ、「家活」の役割が問われているのかもしれませんが。すべての作品に応募者の息吹が込められており甲乙つけがたい状況でしたが、より希望の光をもたらしてくれる作品が選ばれました。

審査委員長 福岡大学 教授 辰己 佳寿子

### 【第5回「家活グランプリ」審査委員】

審査委員長 福岡大学 教授 辰己 佳寿子

審査委員 家の光専門講師 佐久間 幸子

家の光協会 代表理事専務 関口 聡

家の光協会 家の光編集長 中本 英明

※肩書きは審査会当時・敬称略

## \* 目 次 \*

### 【最優秀賞】

#### ○新しいことへのチャレンジ

佐賀県 J A からつ 総務部 総務課 江里 幸子 . . . . . 3

### 【優 秀 賞】

#### ○「家活」から学ぶ 私達にできること

宮城県 J A いしのまき 東松島総合センター 佐藤 智子 . . . . . 5

#### ○コロナに負けず、家活を！

神奈川県 J A あつぎ 組織文化部 生活ふれあい課 瀧口 早苗 . . . . . 7

### 【佳 作】

#### ○こんな時だからこそワクワクし続けたい！

宮城県 J A みやぎ仙南 柴田地区事業本部 槻木支店 佐藤 民江 . . . . . 9

#### ○「家活」と共に . . . 地域に広がる活動を目指して！

愛知県 J A あいち中央 安城北部ブロック 坂田 由里子 . . . . . 11

※「家の光用字用語集」にもとづき、本文の表記を一部変更しています。

# 新しいことへのチャレンジ

佐賀県JAからつ 総務部 総務課

江里 幸子

---

「えっ？ わたしが生活指導員！？」支所の金融窓口係だったわたしに異動の内示が出たのは今から10年前。前任の方々は大々々の生活指導員！ という感じだったので、こんなわたしに務まるのだろうかと不安でいっぱいでした。とにかく、最初の1年は地区の女性部担当として年間行事をこなすのに必死で、あっという間でした。

2年目になると少し余裕も出てきて、『家の光』をもっと活用しよう！ と思いました。手芸が好きなわたしは『家の光』が届くとすぐにハンドメイドのページをチェックし、講習会を計画。配達する『家の光』に講習会の案内を貼り付けて参加を呼びかけました。また、料理の講習会も計画し、毎月、手芸と交互に開催するようにしました。すると、これまであまり活動に参加していなかった女性部員も講習に参加してくれました。なかには共同購入商品のファンになり、他の部員に商品のよさを宣伝してくれる方もいました。

それから、マンネリ化した活動に変化を起こしたいと考え、毎月の営農学級で家の光記事活用を提案し、絵手紙、布ぞうり、エコクラフトバッグを作りました。エコクラフトバッグ作りは、今も生活文化活動グループとして継続しています。営農指導員も毎回『家の光』の園芸コーナーや家庭菜園の付録を活用して野菜作りの話をしてくれたので、新規購読者も増えました。その後、3年間は本所に配属となりましたが、やっぱり地区活動に携わりたいと思い、みずから希望して地区の女性部担当に復帰しました。

そのころ地区では、女性部役員の成り手がなく解散してしまう支部も出てきていたので、どうすれば役員の負担を減らせるのかを考えました。そして、いままで時間がかかっていた支部長会議での協議をなくし、事前に地区役員5名で協議してきた内容を支部長会議で報告するかたちに変えました。そうすることで時間に余裕ができ、家の光ハンドメイドや簡単な料理などの講習を取り入れることができました。堅苦しい会議だけのときよりも支部長同士が仲よくなり、毎回楽しみに参加するようになりました。「来てよかった」「プラスになった」と言っていたら、わたしも次はなにをしようか考えるのが楽しみでした。

令和元年、こんどは本部担当として本所に異動。これは大きなプレッシャーでした。本部活動は総代会、女性部大会、役員研修会、女性大学、あぐり親子スクールと年間活動が計画されています。それでもなんとか1年目の活動を終え、2年目になるとまたなにか新しいことがしたいと思いました。

そこで『家の光』2020年9月号掲載の「クルクル巻きずし大作戦」で告知された“巻きずし活動コンテスト”への応募を会議で提案しました。食農交流会として女性部だけでなく一般消費者にも参加してもらい、「巻きずし体験教室」を行うことに決定しました。さらに会議に同席していた青年部担当者も「ぜひいっしょにやりましょう！」と青年部の協力を申し出てくれました。当日は女性部と青年部に加え、12名の消費者が参加し、巻きずし作りをとおして交流を深めました。各組織活動や『家の光』を紹介し、意見交換するなかでJAへの興味も持っていただけました。女性部役員からも「こういう活動ができてよかった。もっと地域に発信していきたい」と意欲的な意見もあり、提案してよかったとうれしく思いました。

また、JAからつでは組合員と役職員の情報共有に『家の光』を活用するため、全役職員による普及運動に取り組んでいます。しかし、職員からは『家の光』＝女性部の雑誌と思われており、年間購読していてもあまり理解がなく、読んでいない職員が多いことがずっと気になっていました。そこで、わたしは朝礼の1分間スピーチで『家の光』の記事を紹介しました。それから、「読みどころ」に手書きコメントを添えたボードを作成し、本所のトイレに掲示しました。すると、しばらくたったある日、若手の男性職員が朝礼の1分間スピーチで『家の光』を片手に、なんとおすすめ記事の紹介をしてくれたのです！ わたしの発信もむだじゃなかったんだ！ とうれしくなり、「ぜひボードに顔写真付きで紹介させて！」とお願いしました。それから毎月、同じ部署の職員におすすめ記事を紹介してもらえようになり、顔写真も“表紙の人”風加工するなど、日々改良を重ねています。

「自分もこんなふうに載りたいです」と言ってくれる職員もいて、少しずつみんなが興味を持ってくれるようになりました。やはり、知っている職員の写真は目に留まるようで、「〇〇さん、載ってたね〜」「ボードを見て気になるページを読むようになったよ」と反応もたくさん！ 最近では、他部署にもモデルの勧誘に行っています。もっともっと職員にも活用してもらえようように広めていきたいと思っています。

わたしにとって『家の光』は女性部活動のヒントや学ぶことがたくさん載っている教科書です。これからも『家の光』によいアイデアをもらいながら、新しいことへのチャレンジを続けていきます。

# 「家活」から学ぶ 私達にできること

宮城県 J A いしのまき 東松島総合センター

佐藤 智子

---

「これからの女性部活動、いったいなにができるんだろう？」

なにもしないことがいいのか、なにかしてもいいのかわからず悩む日々でした。新型コロナウイルス感染症が猛威をふるい始め、宮城県でも毎日のように感染者が出る状況。わたしの地区でも3月初めより活動は自粛せざるを得ない状況となったのです。なにかできる事はないのかと、自問自答しながら、こんなときだからこそ女性部員の心が一つになっているなにかがなければ……、と感じていたのです。そんなときに会費を納めに来た部員さんが「活動はいつできるかわからないけれど、できる日までみんなで同じ気持ちでがんばっぺしね」と帰っていったのが心に残り、集まれなくても共通の話題となるなにかがあればと、女性部長に相談し2020年5月より情報共有のきっかけとして「女性部たより」を発行することにしました。

まずは女性部活動の現状やレシピ、その当時必要としていたマスクカバーのアレンジ記事を掲載したいと考えました。長年事務局をやってきたわたしは、なにかあれば『家の光』から情報を探しては女性部の手芸教室や役員会で使えるようにと、毎月『家の光』の中からお気に入りの記事・レシピ・ハンドメイドなど、項目ごとに分けそれぞれファイリングしていたのです。その中から自宅にあるにある材料でできるものを探し、「女性部たより」と共に渡すことにしました。まずは『家の光』2020年7月号の「ストックマスク」や2015年3月号の「針金ハンガーモップ」と「おうち時間」にできるお勧め作品を準備しました。「『女性部たより』を見て作ったんだよ」と作品を持ってきてくれる部員さんもいて、まずは読んでくれているんだとうれしく感じました。

女性部の役員会では、役員のみなさんに家でも『家の光』を手に取り読んでもらうため、事務局お勧めの記事を紹介する時間を設けています。ヨガや認知症、防災などそのときの女性部活動に合った記事を選び紹介しています。そんなとき『家の光』2020年10月号に“できないことを嘆くより、できることをみんなで考えて”と全国の女性部の現状が書かれた記事が掲載されていました。役員会の記事活用の時間に、さっそくその記事を紹介し、わたしたちにも今だからできる活動があるのではないかと問いかけ、食で地域を元気にしたい思いを伝え“フードドライブ”に

取り組むことにしたのです。まずは次回の役員会まで情報収集をすることにしました。全国の仲間の活動は、同じ立場に置かれた自分たちにもできる活動を考えるきっかけづくりになったのです。

役員さんが活発に状況収集をしてくれ、地域食堂を運営している方との出会いを繋いでくれ、部長とともにお話を聞かせていただきました。さっそく次の役員会でその報告をしたら1人の役員さんから「前回の会議で話が出ていたので、わたしはおすそ分けする準備をしていたよ。みんなで取り組みましょう！！」と力強いお言葉。その言葉が他の役員さんの心に響き、「だったらチラシを作って配った方がわかりやすいよね！」「野菜などは当日に持ってきてもらえば野菜の傷みも少なくなるね」と意見がたくさん出てきました。事務局のわたしもみなさんの意気込みに負けてはいられないと、翌日にはチラシを作成し、全部員へ配布することができました。また作成したチラシは「女性部たより」や「地域版広報誌」にも掲載し組織や組合員にも広く知ってもらえるようにしました。『食品おすそ分けプロジェクト』と銘打って始めたフードドライブは、わずか10日間で、食品約330点が集まり、地域食堂を運営する団体へ“おすそ分け”として提供することができたのです。その活動が社会福祉協議会の担当者にも伝わり、今後の活動にはぜひ協力させてほしいと連絡があり、JAだけの活動ではなく地域を巻き込んでの活動として大きな輪となってきたのです。

きっかけは『家の光』の記事から始まり、「できないことを嘆くより、できることをみんなで考えて」の言葉で、女性部の今後の活動を動かす言葉となりました。女性部の組織力は大きな“チカラ”を秘めています。個人の小さな“チカラ”が女性部の結束によって大きな“チカラ”となり地域を動かす可能性があるのです。それぞれの地域で女性部員の力が発揮できる活動はどれかを探し、そして誘導していくのかは事務局にかかっているのです。みんなのやる気が上がると、組織力も強くなっていきます。みんなのやりがいとなる活動を導き出し、事務局としてできることを全力でやっていきます。わたし自身も楽しみ協力し生きがいを感じながら参加しているのです。事務局が楽しいと思えない活動は部員さんたちも楽しいと思えないように感じるからです。もしかしたら部員さんたちより活動をいちばん楽しんでいるのはわたしなのではないかと思っています。

みんなに、生きがいとなる活動のヒントをくれるのはいつも『家の光』です。まだまだ女性部活動でやってみたいことはたくさんあります！ 『家の光』からそのヒントをもらい、女性部と共に前進あるのみ！！

# コロナに負けず、家活を！

神奈川県JAあつぎ 組織文化部 生活ふれあい課

瀧口 早苗

---

昨今、新型コロナウイルス感染症拡大により、みなさんもたいへん苦勞をされているのではないのでしょうか。わたしもまるで長いトンネルに入ってしまったような感覚で、いろいろと迷っていました。そんなとき、光を灯してくれたのが『家の光』でした。まだまだ、トンネルの出口は遠いですが、「家活グランプリ」を通して、職員のみなさんと活動を共有し、共に前を向いていけたらと思います。

わたしは、本所で女性部担当をしています。女性部活動は大半が対面にて行うため、コロナ禍の影響で大人数で集うことが難しく、活動できないことにとっても悩みました。そのなかでも「やれることを考えて取り組もう」と今だからこそ、前向きに考え始めました。

そこで、自宅で手芸を取り組めるように部員全員へ「オリジナル手拭い」を2枚ずつ配付しました。そのさいに『家の光』で募集していた「ハンドメイド大賞」への応募も併せて勧めることにしました。すると女性部員から熱のこもった申込書が届き、コロナ禍であっても活動に『家の光』をプラスすることで、こんなにも活動が活性化するのだとたいへん驚きました。その後も手拭いの追加購入者が相次ぎ、その販売代金はフードバンクへ寄付したことにより、地域貢献へ活動の幅を広げることもできました。このことをきっかけに、次年度は既存の活動にコンテストや応募などをプラスして、より有意義な活動とし、多くの方に参加いただけるよう計画を進めています。

そのほかにも少人数の部会や自宅で自主的な活動を行うきっかけづくりとして、『家の光』に掲載されていた2種類の「手芸キット」を回覧にてとりまとめました。すると163名もの購入があり、コロナ禍であっても多くの方に「家の光記事活用」に取り組んでもらうことができました。さらに、完成した作品は支所店窓口へ展示することで地域の方々へ『家の光』や「女性部活動PR」を行うこともでき、女性部だけでなく地域の方も楽しめる活動となりました。

さらに、「おうち時間」が増えているなか、自宅でできる楽しみを提案したいとの思いで、回覧を活用した取り組みも行いました。『家の光』を読むきっかけづくりとして「おうちで家の光活」と名付け、わたしが思うお勧めの読みどころを毎月



紹介し始めました。紙面は続きを読みたくなるよう工夫を施し、好評いただいています。それだけでなく、女性部担当者のイチオシ「家の光図書」も担当者目線のお勧めポイントと一緒に掲載し、とりまとめも併せて行いました。回覧を活用することで全女性部員へ『家の光』や「家の光図書」をPRできることがわかり、今後も定期的に紹介していくこととしました。

女性部はコロナ禍ではなかなか集うことができませんが、『家の光』を活用すると離れていても同じ活動や情報を共有することができ連帯感を保つことができました。またこのような状況下でもさまざまな方法で家活をすることで、教育文化活動をすすめることもできました。今後も『家の光』とともに女性部が輝けるよう活動を促していきたいです。

さらに感染症の流行をきっかけに、もう一つ頭を悩ますことがありました。それは各種イベントが中止となり、「組合員との広がる距離」を顕著に感じたことでした。しかし、悩んでいるときに受けた研修で、組合員との関係強化を勧めるためにはまずは「役職員が知り、学び、考えることが必須」と教わりました。それがきっかけで「担当者だけでは足りない、いますぐ全職員一丸となり教育文化活動を学ぶことが必要だ」と感じ、いままでは「担当者会議」や「担当部署の職員会議」などでは「家の光の時間」を設けていましたが、全支所店へ職員会議にて設けてもらえるようお願いしました。

それだけでなく取り組むのに参考になるよう、「読みどころ」を全職員が閲覧できるよう掲示板に掲載するなど、担当職員としてバックアップにも努めています。そうすることで共通の話題も増え組合員と職員を結ぶコミュニケーションツールとして活用しています。そのほかにもYouTube「家の光チャンネル」を紹介したり全職員に家の光図書『JAのいま、これからの未来』または資材「『家活』で組織基盤強化！」を教本として配付したりして理解浸透を図っています。今だからこそ職員が学ぶ術を提供し、たくさんの方を学び、全職員一丸となり今後もJA自己改革をすすめていきます。

わたしは日々「『購読者』を『愛読者』にしたい」を目標に取り組んでいます。そのためにはとにかく活用し、より身近であるよう努めています。JAあつぎでは今年度「長期高率普及実績」を受賞することができました。担当者がたくさんの方の活用を通して愛読者を増やせた成果だと思っています。昨今ではコロナ禍で新たに行なった「家活」がたくさんあり、学びもたくさんありました。感染症によりまだまだ長いトンネルは続きそうですが、「今こそがチャンス！」と考え『家の光』に頼りながら、前向きに「家活」をすすめ、もっともっと愛読者を増やしていきます。

# こんな時だからこそワクワクし続けたい！

宮城県 J A みやぎ仙南 柴田地区事業本部 槻木支店

佐藤 民江

---

わたしは、柴田地区組合員担当に異動となり 2 年になります。異動する前は別の地区で同じ仕事を 3 年間経験しており、不安がありつつも新しい地区でどんなことができるかなとワクワクしていました。ところが、異動して 1 年めの 10 月には東日本台風の襲来。そして昨今のコロナウイルス感染拡大と続き、イベントが次々自粛となるなか、当 J A で毎年 5 月に開催しているグリーンフェア（野菜苗の販売）も規模を縮小して、野菜苗の販売とグリーンカーテンコンテスト用の苗配布のみとなりました。おうち時間の家庭菜園ブームもあり、多くの来場者がゴーヤーの苗を持ち帰っているのを見て、支店にもグリーンカーテンを作ろうとさっそく準備にかかりました。

しかし、ネットを取り付けるには屋根が高すぎて無理。そこで、以前担当していた地域で栽培が盛んだった“もろきゅうり”のトンネルを思い出し、農協らしく園芸資材を活用した野菜トンネルを作ろうと思いつきました。支店前はコンクリート張りで土はどうしようかと考えていたときに『やさしい畑』2019 年夏号の「緑のカーテン+肥料袋は名コンビ」という記事が目にとまり、それを参考に肥料袋に土を入れゴーヤーの他にもつる有り野菜など 10 種類を植えました。

すると「ほんとうに肥料袋で栽培してるんだね！ 知り合いから聞いて見に来たのよ！」という方も。しかし、組合員担当は 2 人とも農業経験ゼロ。ここで夏野菜を中心に『家の光』のバックナンバーや、毎月届く「家の光図書」のさまざまな園芸に関する本の記事を大搜索！ これらを参考に始めてみたものの、経験値ゼロの 2 人に早くも限界が……。そこで、直売所に野菜を出荷している顔なじみの組合員さんに相談すると「教えてやっがら！」と快諾。来店されるたびにトマトは脇芽を摘むこと、キュウリは誘引すること、実がつかずに花ばかり咲くゴーヤーを心配するわたしに「もっと暖かくなると実がつかないから心配するな！」などたくさんのお話を教わりました。

わたしの働く職場は、近くの小学校の通学路。以前は、夕方近くになると下校する子どもたちのにぎやかな声が響いていた支店の前も、今はマスク姿の子どもたちが静かに歩いています。そんな姿を見て、この野菜トンネルで子どもたちを楽しませることはできないかと考え、ヒントを求め『ちゃぐりん』を手に取りました。ふ

だんは女性部と日々「家活」に励んでいるわたしにとって『ちゃぐりん』は未知の雑誌。なにげなくページめくっていくと、イラスト付きのクイズに目が留まりました。

そうだ野菜トンネルでクイズをしてみよう！ と、小学生以下の子どもたちを対象とした「野菜当てクイズ」を実施。開催チラシの配布や声かけを行いました。下校中の子どもたちはなかなか野菜トンネルに足を止めてはくれません。そこで「農協で野菜当てクイズっていうのをしてるんだけどやってみない？」と下校途中の子どもに思いきって声をかけてみました。すると、声をかけた子どもが次の日から毎日たくさんの友だちを連れてきてくれ、開催期間の2週間で50人の子どもたちが野菜クイズに参加してくれました。今では、その子どもたちが下校するとき、笑顔でこちらに手を振ってくれるようになり、子どもたちとのつながりがとてもうれしく感じていることの一つです。

野菜トンネルの活用はこれだけでは終わりません。『ちゃぐりん』2020年10月号に「ムラサキイモ〜ンブラン」の記事を見つけ、野菜トンネルに植えたサツマイモでまたあの子どもたちの笑顔が見れる！ と11月にモンブランとクリスマスリース作り、そして野菜トンネルのサツマイモ収穫という「芋づくし体験教室」を開催しました。「ムラサキイモ〜ンブラン」は何度も試作をし、当日は小さい子どもでも簡単にできるよう少しアレンジを加え、マスク越しではありますが参加した親子の楽しそうな笑顔にうれしさを感じました。

ほかにも、『家の光』2020年9月号の「クルクル巻きずし大作戦」の記事に目をつけたわたしは、このコンテストへ応募するという今年度の新たな目標を立て、その場で食べてもらうことはできませんが、コロナ禍の「おうち時間を楽しむ」ネタ提供ができればと、女性部や地域の親子を対象にクルクル巻きずし作りのイベントを開催しました。地元の飾り巻きずしインストラクターにも賛同いただき、JA広報誌にレシピを掲載することもできました。そして12月、すべての収穫が終わったあとの野菜トンネルをこのまま骨組みだけを残しておくのはもったいないと、野菜トンネルイルミネーションを企画し、地域の方々に癒しを届けることができました。

組織活動は「だれのためになにがしたいか」が明確になると、いろいろな光が見えてくるのだと思います。自分の思いを声に出し挑戦できる環境に感謝しながら、野菜トンネル2年めはどんなことを企画したら地域の方々を笑顔にできるかな〜と今からワクワクしています！

# 「家活」と共に・・・地域に広がる活動を目指して！

愛知県 J A あいち中央 安城北部ブロック

坂田 由里子

---

J A が組合員や地域住民との繋がりを強化するために、支店組織活動は重要性の高いものとなっています。わたしが組織活動を行ううえで『家の光』はそのヒントを与えてくれ、組合員にとっても J A をより理解していただくために必要な情報誌です。また、現状の問題として近年イキイキレディース会員の高齢化が進んでおり、次世代を担う会員を増やしていくことがたいせつだと考えています。

今年度も重点実施事項として「家活」を中心とした組織活動があげられています。そこでわたしの目標は

②「家活」を取り入れた次世代参加者の獲得増加

②『家の光』の認知度を向上させる普及活動

③ 購読推進

としました。

それぞれの活動経過とその成果は①の「家活」を取り入れた次世代参加者の獲得増加では、まず「J A を知ってもらうこと」を目的に若い感覚のハンドメイド記事を活用し、「コットンパールのネックレス&飛び出すメッセージカード」（『家の光』2019年6月号、2019年12月号）、「ちりめんがま口財布」（2020年1月号）、「ミニサボテンの寄せ植え」（2020年8月号地区版）を企画しました。ネックレス作りではイキイキレディース会員の中に次世代が3名参加され、後日開催する「防災手拭いで作るミニバッグ」（2019年9月号）、「おしゃれもんぺ」（2019年8月号）にもお誘いし参加いただきました。がま口財布では4名、ミニサボテンでは5名の参加がありました。次世代参加者は家活以外の組織活動も含め延べ18名あり、この活動が少しずつ浸透しているように感じます。

②の『家の光』普及活動については、組織活動の最初に「『家の光』をご存知ですか？」と問いかけます。「以前読んだことがある」「聞いたことがある」など知らない人はほとんどいませんが、既購読者にはもちろん、未購読者の方に「今ではリニューアルしその時期に即した旬の話題も豊富です」と最新号を片手にわたしのおすすめ記事を紹介します。内容の魅力を余すことなく伝えることで、積極的に読

んでいただけるよう努めています。「防災手拭いで作るミニバッグ&あずま袋」(2019年9月号、2017年5月号)作りではふれあい担当2人に協力をお願いし、「ワイシャツかつぼう着」(2020年4月号)作りでは洋裁が得意なイキイキレディース会員に講師となっていていただきました。講師を手伝ってもらうことでわたし自身に余裕ができるため、参加者との会話からいまどんなことに興味があるかニーズを知ることができ今後の企画に役立ちます。また、女性組織しんあんレディースの役員会議では「落ちない三角しおり」(2017年11月号)を作り、役員と職員みんなの交流が深まりました。このようにさまざまな『家の光』の記事を紹介することで新規購読が3件ありました。本の内容を知ってもらったうえで契約をいただくことはとても重要なことだと思います。活動が終わって参加者が帰られるとき、笑顔で「ありがとう」と言ってもらえ「家活」を楽しんでくださっているのを実感しています。

③の購読推進については、7月1日から10月12日までの重点期間に向けてブロック内で作戦会議を実施し、支店長、次長、ふれあい担当、支店職員に協力を依頼しました。6月に準備として総代、支店運営委員を対象に推進リストの作成、サークル活動者個々の購読状況をチェックしました。7月はリスト先へ支店長と同行訪問で5件獲得、次長と窓口来店者に推進し1件獲得しました。8～9月はふれあい担当と同行訪問で2件獲得、サークル活動者で未購読者へ推進し4件獲得しました。また、家活講座のなかで「お家でゆっくり読んでみて」と見本誌を貸し出しすると、「いいこと書いてあるね」と3件獲得できました。

『家の光』新規獲得実績合計は恒常推進も含め1月末現在、新安城支店で18件、三河安城北支店で8件となっています。

さらにうれしい効果もありました。ワイシャツかつぼう着作りのとき講師が「おしゃれもんぺも作ったのよ」と持ってみえて、それを見た参加者が「坂田さん、わたしも作りたいから考えて」と次々と声が上がりました。早速「おしゃれもんぺ」作りを企画し、本部職員からも支援いただき2回コースで開催しました。また、しんあんレディース役員は、毎年支店ふれあいまつりで、サツマイモご飯を作るなどの活動もしていますが、「今年はコロナで中止だけどせっかくだからみんなでなにかやろうよ」と提案があり「ちりめんがま口財布」を作りました。イキイキレディース会員たちがみずからなにかしたいと意欲的に活動し、盛り上がりを感じます。

次年度の課題は、今年度参加してくれた次世代にリピーターになってもらうこと、新たな次世代参加者を増やしていくこととなります。対策として今年度できなかった親子体験・ヨガ教室・料理教室などを企画します。「次はなにやるの?」といつも楽しみにしてくれる方々もいます。まだしばらくはコロナ禍で大変な日々が続く

と思いますが、「家活」で楽しいひとときをお届けしたいです。他の職員やイキイキレディース会員みな様にご協力いただけることに感謝し、「家活」とともに組合員や地域住民へさらに広がる組織活動の活性化を進め、JAファン、事業利用者の増加に繋がります。